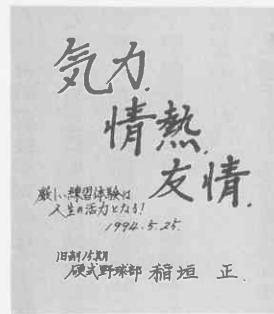


戦時下、野球部の思い出

旧制十五期 稲垣 正



放課後、カーン、カーンと耳に響く音にひかれて、よく野球部の練習を見に行ったが、時折ファウルボールが飛んでくるので、ぼんやり眺めているわけにいかない。ある日、たまたまそばに転がってきたボールを拾い、握った瞬間、「石の

球だ」と思った。よくこんな硬いボールを投げたり、捕ったりするものだと、驚き感心したものである。そんな或る日、三年先輩の鈴木音安さん（故人）に「君も柳町だから野球部に入らねばならない。明日からグラウンドに来いよ。」と言われてとまどったが、しかし、それは半ば命令のようなものだった。

数日後、私は部長で学級担任でもあった上原俊一先生に入部の届けをした。入部してみると、鈴木さんの言ったとおり、家の向かいの大和勇助さん（旧十期）をはじめ、五年生の住吉忠三、四年生の金谷忠吉、鈴木音安、杉原茂さん等は皆柳町の人達で、平川民治監督（故人）の下で汗を流し鍛えられた名選手ばかりであった。それからは毎日放課後は部室に駆けつけて、グラウンドを均らし、水を撒き、ネットを張り、用具を運び出して準備を整え、上級生の来るのを待つのが一年部

員の日課となった。また、雨の日は内野周囲に杭を打ってロープを張りめぐらすなど、私達はすべてマネージャーの安保高俊さんの指示に従って走り回った。私達はユニホームやグローブは部室の箱の中から適当に体や手に合ったものを選んで使用したが、どれもこれも先輩の使い古したぼろぼろのもので、わけでもグローブは中の綿のようなものは全くなく、革の手袋といった体のものであった。勿論スパイクはなくズック靴である。練習中は、内、外野で掛け声やボール拾いに走り回る。日が落ちる頃になると、ボールに石灰をつけて白く目立つようにしてやる。ようやくノックが終わると、外野に並んで掛け声の練習、それからベースランニング、そしてミーティングで終わるが、一年生はそれからグラウンド均らし、用具の後片づけ、最後に部室の錠を確かめてようやく終わりになる。この年七月の奥羽大会県予選、一回戦でわが能中は七回コールドで横手中に大勝したが、制覇は成らなかった。また、この大会で秋商に長谷川という名投手がいることを知らされたのが印象に残っている。

しかし、わが能中にも五年生の桑名睦さん（故人）という名遊撃手がおられたことが忘れられない。

昭和十五年、とにかくつらい一年をなんとかやり抜いて二年になったが、残念ながら退部者も出て同期も数人となった。そして深井、熊谷君等の新入部員を迎えた。金谷さんを新主将に、鈴木、杉原、西村（長谷川）、今、原田、四年の伊東、三浦、鎌田、勝永、三年に石田、平山、工藤、西村、浅野、藤原による新チームがスタートした。

二年になったとはいえ、われわれは佐藤市雄マネージャーの下で相変らずの毎日であった。この頃は、日華事変も長期化の様相を示し、用具、特に革類は極度に不足してきており、硬球も入手困難となり、一、二年生は練習終了後、皮の破れたボールを各自数個ずつ割り当てられ、家へ持って帰り、木綿糸で縫いあげていくのが日課となった。ひびのはいったバットは釘や麻糸などで補修して、バット振り用にするなど、悪戦苦闘の状況となった。しかし、こうした中でも夏の大会を目指しての猛練習は続いた。思えば、私の在学中を通して、この年の野球部が最強であったと思っている。鈴木、杉原の名バッテリー、金谷、西村、鎌田の内野陣に、今、伊東、三浦の外野陣で固め、投打揃ったチームであった。それだけに、平川監督の熱のこもった厳しい叱声（しごき）がグラウンド一杯に響き、真っ暗になるまで激しい練習が続けられた。その成果がみのり、全県大会では宿敵秋商を破り、準決勝まで進んだ。残念にも秋田師範に惜敗はしたが、しかし、能中野球部は八月の奥羽大会に初出場を果たしたのである。奥羽大会では、鈴木さんが十数個の三振を奪う好投をしたが、強豪五所川原農林に延長の末敗れ、涙をのんだ。

私達下級生は応援に行けなかったが、帰って来た選手を駅頭に迎え、真黒に日焼けした先輩の顔を見て涙した。そして先輩のバッグなどを持って帰ったことが忘れられない。この秋、名監督平川さんは辞任され、伊藤簾（旧四・故人）氏に後任を託されたのである。

昭和十六年、三年になってわが同期も、佐々木、鈴木、播摩谷、稲

垣、秋元、杉本の六人となった。新チームは伊東（主将）、三浦、鎌田、勝永、四年に石田、平山、浅野、西村、藤原、伊藤、二年の深井、熊谷等であった。われらも三年になってようやく、トスやバッティング練習に加わることにになり、やっと部員になったという実感が湧いてきたものだ。伊藤監督は前年度の先輩のあとに続けと、さらに厳しい練習を続けた。当時は私達がグラウンドに出て行くと、監督はすでにベンチで待っており、バッティングに入る頃には、佐藤憲一郎（故人）、村中忠吉（故人）、宮腰庄作（故人）、米光博、田山周作さん等、多くの先輩が、ユニホームに着替えて練習に加わり、共に汗を流したのである。特にシートノックに入ると、交代で激しいノックを受け、グラウンドに這わされた。動けなくなると側へ来て気合いを掛ける。さらにまた、「キャッチャーボール」の声がかかると、上級生から順に、バックネット前に一人ずつ出て、内野ラインにぐるりと円く並んだ部員と先輩達からの豪球を受ける。両手でしっかり捕らなかつたり、一球でも落球すると、また最初の人からやり直しという激しい練習であった。伊藤監督の言う「野球の基本はキャッチャーボールから」を、徹底して練習させられたのである。受けそこねて顔に当て倒れる者もおれば、突き指をする者もある。痛さ故、自然に涙がにじみボールがかすむ、手に水をかけてまた頑張る。手の甲が腫れあがり、夕飯で茶碗が持てず、テーブルに置いたままスプーンで食べるような日も続いた。しかし、こうしてスピードに馴れ、すっかり補球が出来るようになると、怖さがなくなったのも事実であった。スライディング、ホームへの滑

り込み練習などで両肘はすり傷の絶えることがなかった。監督は私達の出来るまで何度も繰り返しやってみせる。実戦的な練習法を重視したファイト旺盛な人であった。当時の強化合宿はグラウンド下の松林の中にあつた寄宿舎であつたが、厳しい練習に汗と埃にまみれた体を、栄町の風呂屋へ駆け込んで洗い流す。この時はさすがに怖い先輩も笑顔になり、楽しさが湧いてくるひと時であつた。物資もままならなくなつてきていた時勢であつたので、先輩達の差し入れや援助に負うところが大きかつたと思う。この年の春の県北大会は大中グラウンドで行われたが、奇しくも能中对能工の能代勢の決勝となり、三浦、石田—平山のバッテリーで善戦したが、初回で大量点を奪われ、能工の打棒に屈し、大差で破れた（能工初優勝）。こうした中にも戦局は毎日に急迫した情勢となり、国策にそつた学制改革が進められ、七月には全国中等野球大会は禁止となり、野球部も野球班となり、学生服も国防色に戦闘帽（新一年生より）と変わるなどした。そして遂に十二月八日大平洋戦争が勃発するに至つた。

翌十七年、石田、平山、工藤、藤原、西村、伊藤、四年は佐々木、稲垣、秋元、播摩谷、三年は深井、熊谷、二年は平山、松浦等で新チームの練習が始まつたが、残念ながら戦局急を告げるに伴い、多くの制約を受けるようになった。しかし、われらは逆に情熱を燃やして野球に打ち込んだ。だが、五月、これまで行われてきた市内三校野球リーグ戦も、能工が廃部するに至つて事実上開催不可能となり、能代市中等野球連盟は解消し、代わつて能中对能商で春秋の定期戦を開催す

ることになったのである。そして五月十日、初の春の定期戦一回戦が、能中グラウンドで行われた。能中は工藤—平山のバッテリーで善戦し、一対七で初戦に勝利したが、二回戦は一対五で能商に敗れた。

ちなみにこの定期戦から両軍ともスパイクの使用は禁止され、ズック靴または、地下足袋でグラウンドを走り廻つたのであり、応援団も復活したものの、試合中は拍手のみというものだった。審判の「よし」「だめ」などのコールは耳になじまず、まさに戦時下における最悪な状況での野球となつたのである。

こうした中で、十一月、佐々木君を新主将として秋の定期戦に臨んだが、残念ながらこれを最後に遂に野球部は解散となり、部員はそれぞれ他の班に移ることになったのである。以後、野球部は終戦後二十一年まで活動を中止することになる。同時に、これまで幾多の先輩と共に練習の汗を流してきたグラウンドにも、増産のための鍬が打ち込まれることになったのである。戦後復員してあのグラウンドに行つてみたが、囲りの桜の老木のみが名残りをとどめていたのを眺め、感慨深い思いであつた。

ふりかえれば、私の野球部時代は、先輩の残していったような輝かしい戦績もないまま、まさに戦況の進展とともに過ぎた日々であつたと思う。しかし、あの激しい苦しい練習に汗した日々は、野球という一つの秩序の中で、熱中して自分を鍛えることが出来た青春時代であつたと今もなお自負している。後年社会に出て、同じ野球部で育まれた熱い友情によって、同輩は勿論、先輩、後輩の諸兄と共に広く知

人友人を得て日々を歩めるようになったことを思えば、あの練習で流した汗が私の人生の活力になっているのだと思えてならない。

母校が七十周年を迎えた今日、校舎をはじめ、雨天練習場、整備された野球グラウンド等、素晴らしい環境に恵まれた中で、部員達は元氣潑刺と練習しているのを見るにつけ、羨望と同時に往時を顧みて時代の流れというものを感じさせられるのである。後輩諸子の健闘を祈って止まない。

(松陵会副会長)

母校創立七十周年記念の年に 卒業五十周年を迎える十六期生

旧制十六期 佐藤長俊



敗戦の年の三月、わが十六期生百一名は卒業した。だから母校創立七十周年の記念のこの年に、母校卒業五十周年の記念の年を重ねて迎えたのである。支那事変という名の戦争中に入学、翌年の大東亜戦争を経て、玉音放送の敗戦の日、昭和

二十年八月十五日の少し前の卒業だった。だから能中在学の思い出は戦争一色にいろどられていっていると言っている。しかし、その中で青春時代もあった。

◆柔道部のこと

初めて運動部に入って柔道部を最後までやり通したことをうれしく思っている。恩師須田定基先生のことには柴田重行君が書いている。わたしは二年間マネージャーをやって、三浦富雄先輩達のこともしろいろ思い出されて、たまに今でも柔道部OB会に出席する。大阪府岸和田市在住のキャプテン能登嘉吉君には所用で能代に來ると必ず呼び出されて語り合う。柔道部同級会を開けと催促される。同期会で会う柔道部仲間、梶原茂兎悦君、秋林要人君も元氣で嬉しい。

◆先生たちのこと

名物先生が多かった。グラウンドで語った高橋一郎校長の癖、能中焼失後の夜警当番のわたしの前で潮田潔校長の俳句「交代やもう来る頃か遠蛙」の一句、吉田慶助校長の癖。若松町は先生の町であった。漢文の野呂先生、教頭の相庭先生、地理の中森先生、体操の太田口先生、英語の小竹先生、柔道の須田先生、事務の相場先生などたくさん住んでいて親しみ深かった。ザサン、チャイナ、ナットウなどあだ名が親しみ深い先生もいた。絵をのこしてくれた小田島十郎先生、花輪町でお会いした小田島由男先生、英語できびしくして教育長になった宮腰斌一先生なども忘れられない。

◆生徒動員のことなど

東雲飛行場、発盛鉦山、相模原陸軍造兵廠などに動員されて働いた。毎日のくらしのことだからいろいろな思い出がそれぞれの人生にあることになる。書きつくされないし、戦争中の苦しい思い出であるが、その中にも楽しい思い出がある。休みの日に生まれて初めて東京へ外出

したのがうれしかった。大空襲もこの目で見た。

◆演劇のことミュージカルのこと

能中のときもかくれて淳城座で芸能を観て、戦争中も水の江ターキ―や古川ロッパを東京で観た。演劇活動やみつきになって、能代高校演劇部創立にも力を貸した。今能代ミュージカルを創り続けて十五周年の記念の年、演劇部の後輩、平川勲君、梅田信彦君、富川孝一君たちが続いて参加してくれていてうれしい。

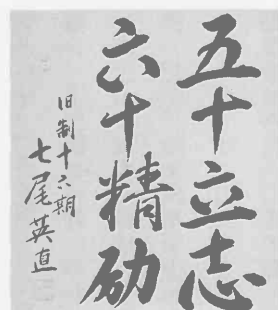
◆そして今十六期生

親しかった仲間も次々と失い、物故者も二十七名になった。残りの内で元気な常連約半分は毎年の、今年特に、同期会を楽しみにしている。

(能代ミュージカル製作委員長)

黄線を巻いた学生帽

旧制十六期 七 尾 英 直



昭和十五年の春、私は旧制能代中学校の入学試験を受けた。この年は神武天皇即位二千六百年目だとのことで、学科試験を省略、駆け足と「紀元は二千六百年」の唱歌を歌わせられた。走らされた後に歌わされたから、私は息が切れ「金鶏輝

く日本の」から「ああ一億の胸は鳴る」までやっと歌ったが、幸いにも合格出来た。田代小学校の担任の先生が内申書を全部「甲」と書いてくれたお陰である。

私が入学した時の能代中学校は、制帽も制服も国防色で、学生帽には黄線を巻いていた。「日本に二校だけだ」と聞いた。「能代の大巾シヤツび黄色の白線つけた」と、洒落を言った人がいたそうだ。昔は県北の中学校は大中（今の鳳鳴高校）だけで、大中が帽子に白線を巻いていたから、そのように言ったのであろう。

次年度の入学生は、一学級増の三クラスとなり、案に入学して来ただけでなく、一年短縮の四年制となり、我々と同じ年に卒業出来ることになった。しかし、学生帽を被らせず、戦闘帽に黄線を巻いて被らされた。戦時色が強くなったからである。

また、当時の能代高女（今の北高校）はスカートの裾に白線を巻いていた。これも珍しく、我々中学生の目をひいた。中には、こぶらが太過ぎで、ゴム長靴を折り曲げて履いている女学生もいた。その大きなお尻を横目にしていて、上級生に敬礼を忘れた助兵衛が「中学生の本分に反する」と、上級生からぶん殴られていた。

週何時間だったか忘れたが、軍時教練が課せられた。教練の先生のあだ名は「チャイナ」だった。支那事変に従事して来たからである。「明日、査閲官殿から聞かれたら、ファツ音タダシグ応えるように」と訓示した。吹き出した同級生がいた。チャイナは「何がおかしい」と怒り、「貴様たちは」と言って、「キヲツケ」の号令で不動の姿勢

をとらせ、「天皇陛下のために死ぬ」と言った。先生の薦めで陸士や海兵、予科練や特幹にやられ、特攻隊に編入させられた者もいた。

樽子山の校舎が焼け、五年生の時には旧高等小学校の校舎を借りて移ったが、時々授業を中止して、八森鉦山や東雲飛行場で勤労奉仕させられた。十二月には五年生全員が神奈川県相模原軍需工場へ学徒動員させられた。その時、たびたびアメリカ軍のB29による爆撃を受けたが、防空壕にかくれ、死なずに済んだ。

大東亜戦争が膏肓になり、卒業は六月まで延期となり、そのまま軍需工場に置かれ強制労働させられた。同期生は、黄線巻いた中学生の学生帽を被ったままで頑張った。

しかし、農業関係の大学へ進んだ者は「入学して、農業生産に従事せよ」と言われ、私は三月に帰された。六月になって、「昭和二十年三月卒業」と、画用紙に謄写刷りした卒業証書が送られて来た。

(元二ツ井町長)

能代高校七十年の今昔

旧制十六期 袴田 勇 蔵

能代高校創立七十周年記念誌に寄稿するに当たり、まずもって、七十周年を心からお祝い申し上げます。

私どもの同期生三田元悦校長先生が六十周年記念行事を完成してく

れましたが、あれからまた十年が経過したわけがあります。その後、学校敷地周辺の田圃を買収して、学校施設の拡張充実を図りたいという事で、買収斡旋の手伝いをした記憶もありますが、県教委や関係機関の配慮と、学校ご当局的努力によりまして実現しました。

孟子曰
望道而
未見之

昭和二十年
旧制十六期生 袴田勇蔵

私は旧制中学の十六期生であり、昭和十六年の四月から昭和二十年まで母校のお世話になったのですが、当時の学校長は新家校長先生から、高橋一郎校長先生、潮田校長先生、吉田校長先生と四代にわたり、太平洋戦争の真ただ中で、食糧難に甘んじながら、質実剛健に成長しました。四年生、五年生の時は、勤労動員などがあって苦勞もしましたが、お互いに生徒同士支え合いながら、比較的愉快に、充実した生活を過ごしたと思います。昭和十九年の二月には、能代中学の歴史において、最大の不祥事が起こり、校舎がほぼ全焼したのです。現在の市役所横に在った、湊城第一国民学校旧校舎を仮校舎として授業が再開されたのですが、神奈川県相模原造兵廠へ勤労動員されることになり、卒業式も動員先で行われました。

早いもので卒業して五十年の年月を経たわけであり、感無量であります。ようやく旧制中学を卒業して、家庭の都合により上級学校への進学も出来ず、家庭での仕事のかたわら、火災の多かった能代の防災に尽力すべく市の消防団に入団して今日に至っております。此の間、昭和二十四年、三十一年の大火を経験し、水害、日本海中部地震津波

の未曾有の災害に遭遇しました。

それから昭和四十六年、旧制中学の同期生に議員がおらないこともあって、同期生や先輩知己に薦められて、勇躍、市政発展のため、市議会に立候補したのでした。十六期生の田口善一郎君はじめ沢山の同僚に、二十四年の長い間、大変お世話になりました。初めて当選した時、一期生の吉武栄一先生、五期生の柴田寛綱先生、六期生の武田哲郎先生が市議会に居られて（いずれも議会議長の経験者、小生もその一人）手厚いご指導をいただきました。つくづく同窓生は有難いものだなあと感じました。

消防団では十二期生の鈴木音安団長（在校当時野球部のキャプテン）のご高配ご指導をいただきました。平成五年十一月、突如、病魔に襲われて他界されました。人生の掟とは申しながら、全く予期せぬ出来事で、呆然としたのでした。今その後を引き継いで、能代市の消防団長として、熾烈旺盛な決意のもと、能代高校の卒業生として母校の名を汚さないように、災害の多い能代市のために、余命を捧げたいと思っています。

能代中学を卒業してから五十年、私どもの仲間同期生も、入学当時は百名ぐらいいであったのが、私どもは、辛うじて戦争での犠牲者がなかったのですが、それでも三十名近い物故者があります。今は亡き級友の面影を偲び、冥福をお祈りするものであります。私どもの巣立った母校では、立派な恩師に恵まれ、友情の厚い同期生を持つことができ、すばらしい先輩の皆さんを持ったことに、無限の喜びを感じると

ともに、このあとの人生の思い出を感受できることに心の安らぎを覚えるものであります。在りし日の諸先生、諸先輩にお礼を申し上げ、能代高校が七十周年を期に、ますます発展されることをお祈りしつつ筆をおきます。
（能代市消防団長）

思えば十七期生の日々

旧制十七期 谷 内 幸 保



折節に学友と語り合ってきた同期の思い出は、当然に共有する体験やその共感である。学生時代の普遍的な思い出ともいべき修学旅行を、我等十七期生は十六期生とともに知らない。代わってペンをハンマーに持ち換えて軍用機の生産に従事した学徒勤労動員の日々がある。

七十年の校史ではまことに特異な学校生活ということになるが、群馬県小泉にあった中島飛行機製作所の広大な工場で、本県の各中学校や他県の中高等学校、それに専門学校大学の動員学徒とも触れ合い、また交代で寮監に当たられた先生方のいっくしみや励ましを覚えながら、寮生活を共にしていると、非常時という意識とは別に、かけがえのない学生生活と思われ、お互い親しみなんでいた。

空腹と郷愁に悩まされながらも、我々のあこがれやヒロイズムを満たしてくれるものが、いろいろあったと思うのは、今だからであろうか、考えてみると思い出も相対的である。それに自分の教職経験の印象を重ね合わせているかもしれない。現高校生に相当する十七期生の学年は四学年のみで、それも大方は勤労働員の日々であった。

経済的にも能力的にも背伸びをして憧れの能中へ入学できた私には、松陵健児発祥の樽子山の校舎の日に格別な思い入れがある。

昭和十六年入学して間もなく待望の制服制帽が学級に届いた。一C担任の菅原先生は教練教師で我々一人一人の着付けを点検指導されたが、憧れの学帽は戦闘帽だった。これも我々から始まった。

また十七期から一学級増となり学年三学級となった。志願倍率は約二倍で開校以来低いとのこと。我々の不勉強がたしなめられるときに、よく引き合いにされた。「この先輩学年を見習うべし」と漢文の野呂先生がよく言われたのは十四期生のことで、今同窓会名簿を見ても錚錚としている。

横文字のことばの多い中学校生活は、なんとなく新入生の心を得意にさせた。スポーツ用語が活発に飛び交うグラウンドやコートの様子に、学園を感じていたが、それも戦局とともに様変わりしていった。野球部の佐々木満先輩のお名まえもこの印象と重なっている。

休み時間は雨天以外、全員外に出ることになっていて、芝生の上で思い思いの自習をした。二学年の時のこと、始業合図とともに悠々教室に入っていくと、英文文の宮腰先生が待っておられ、「皆さんは遅

刻です」と言われた。「でも先生が早い……」と弁解しかけると言下に「教師より遅れて入室せる者は遅刻と校則にあります。」と言われ、すぐ授業に入られた。先生が赴任された頃のこと、以来英語の授業でのことは、我々の尽きない話題となっている。

白木造りの社殿奉斎所があった位置は、現文化会館の正面玄関辺りになろうか、松陵の面影に通いなれたる学び舎と覚えながらも、さすが五十余年の時空を超える思い出は、遠く遙かである。

(能代市芸術文化協会会長)

戦時下の中学校生活

滑空部のことなど

旧制十七期 小川 浩平



淳一小で五十四名の学級から能代中学へ進学したのはわずかに一割強であった。あこがれの制服制帽に代わって国防色の制服と戦闘帽が渡された。入学式は昭和十六年四月八日であった。四月一日とばかり思っていた十二歳の私にとって、中学校はちがうなあとという最初の感動であった。

日支事変以後の戦域は拡大され、戦争苛烈の度は増していたが不思議に悲愴感はなかった。戦争は必ず勝つと信じていたからである。

そんな時節に入學したのだが、先生方は個性的な方がおられたように思う。蛇腹の縁どりの付いた、学習院の制服のようなそれをお召しの方は九州からおいでの南初喜先生で、担当は西洋史、英作文の小竹先生は新潟県の御出身とか、事ほど左様に「坊ちゃん」よろしくニツクネームに先輩の適切な命名で、先生方にはたいへん失礼であるが「消し炭」とか「ウルフ」とかそれはそれは賑やかであった。

相庭先生から「花曇り」の語釈を求められ、いい加減に答えて笑われたことや上原俊一先生から作文をほめられたことは昨日のことにように鮮明である。その作文の題名は『増産作業の昼』である。

書道は武衛岩雄先生からお習いした。正課の剣道でもある。剣道は小学校四年からやっていたので防具を着けるのには慣れていた。しかし、体力がないので、紅白試合では二人も抜けば上々の成績であった。草野実君や成田守二郎君は強かった。二人とも鬼籍に入られた。太田口先生の体育や菅原教官の軍事教練は厳しかった。「御勅諭！」と言われれば、パツと不動の姿勢をとらなければならない。

こうして十二月八日、大東亜戦争へ突入の日を迎える。部活動は盛んで、一、二年は弓道部へ入った。八幡神社の奉納射会で隣りの的に中して大笑いされたこと、富波良一先輩が国民錬成体育大会で全国三位の入賞など、卒業記念写真にはメダルと共に収まっている。

三年になって谷内幸保君の誘いもあってか、滑空部へ移った。グライダーはプライマリー（初級機）。ふだんはグランドで練習したが、どうしても狭い。分解して東雲飛行場まで運んでいった。

わらびの葉も茂った夏の日の午後、「目標、枝のある桜ッ」の号令でゴム索が引つ張られる。私は搭乗者、突然、ビュルビュルッと変な音がしたかと思うと私はしたたかに叩きのめされた。私はもうだめだと思った。気を失った。ゴム索が切れたのだ。操縦桿を握っている右手、右肩あたりが激しく痛む。高橋周一先生の自転車荷台に載せていただいて病院へ急いだ。能代病院で手当てを受けたが右人指し指の不全骨折であった。右鎖骨も同様。よくまあこの程度で済んだものだ。

この年の部長は柴田久米男先輩、滑空部の写真には寺山清利さん、宮腰新一郎さんの顔も見える。夏が来るとこのゴム索事故を思い出す。そしてまた、戦後五十年の今年、東雲原殉難者慰霊碑の碑文を墨書する機会を与えられて懐旧の情増すことしきりである。

（能代市図書館協議会議長）

旧制十八期生

旧制十八期 高畑 政宏

戦争が始まった翌昭和十七年四月、この年から越境入学が規制されてできなくなり、中学といえは私には能代より他なく、能中へ進学しましたが、荷上場小学校（現二ツ井町）からは一人だけで、他町村の小学校からの人と二ツ井駅から汽車通学しました。戦闘帽と国防色（黄緑色）の服がいわば「制服」でした。ズボンはポケットに手をつ



できませんでした。

秋の夜、十二時にスタートする十六里行軍は一年次と二年次に二回体験しました。貧弱な一年生も、最上級生の大人の五年生も同じというのですから、一年次はこたえました。翌日はトイレにも行けませんでした。それから一年次の秋には、大館中学、鷹巣農林、能工、能商などとの合同で東雲原での戦争ゴッコもやりました。軍事教官がいて「教練」という正規の学科目もあり、その一環でした。

二年生になってからは英語の授業は敵国語だからと廃止、授業よりは勤労動員で、私の場合は東雲飛行場で食堂勤務、その合間にはドラム缶の整理、飛行機の汚れふきなど、そして東能代の米代川での砂利採取でした。三学期の、昭和十九年二月十五日に学校が焼けてしまい、長根町の小学校舎とかが仮校舎になり卒業までそこで過ごしました。

三年生になったら、四、五年生の先輩達は群馬県の工場へ動員されたので、私ら三年生が在校生では最上級生となり、敬礼する相手は先生だけでよく、下級生からの敬礼を受ける方が多く、良い気分でした。私の勤労作業は、秋木の藤山工場で職工さんがたのお手伝いで、秋か

らは中川原の鋳物工場へ通いました。私には修学旅行もなく、今という部活もなく、戦争真っ最中の能中時代でしたが、この三年の夏に船川の神社を宿舎にして海洋訓練が行われ、これに参加したことが楽しい思い出として残っています。三泊ぐらいだったでしょうか、ロープの結びかた、泳ぎ、船の櫓の漕ぎかたなどを海軍軍人の教官から教わったものです。この時は、横手とかの一、二級上の生徒達とも一緒に、船競走などもやったり、貴重な体験をしました。

四年に進級した時は上級生は誰もいませんでした。一級上の先輩は全員が四年で卒業となったのです。ですから、私の四年次は実質の最上級生となつての二年目です。私は松根油の製造作業に従事しました。学校の焼け残った柔道場の前に釜を作り、細かく裂いた松の根っ子をその中に入れて燻し、煙りを冷却管に通して、その先端からタラリ、タラリと出る油を集めるものです。グラントは根っ子の山になりました。作業班は二十人ぐらいいで、これを三つに分け、砂のついた、市民のみなさんが掘ってくれた根っ子を、砂浜から肩に担いで学校まで運ぶ班、それを斧で割って釜へ入れ蓋をして粘土で密閉し、火を焚き、手押しポンプで水を汲みあげ、絶えず冷却管を張りめぐらせた大きな箱に注ぐ班、荷車で東能代の田圃から一日二回のノルマで粘土を運ぶ班で、これを交代でやるものでした。終戦の重大放送も、この釜の前にみんなで整列して聞きました。

戦後は仮校舎での授業に戻りました。そして四年で卒業してもよし、五年に進級してもよし、となつて私は四年で卒業しました。五年に進

級した人達は夏は十和田へ修学旅行をしたと聞きました。

勤労動員も学校により異なり、戦後分かったことですが、和歌山の工場へ動員された中学生は、大地震が起きて崩壊建物の下敷にされたり、工場が空襲されたりで、多くの人が亡くなったとか、当時はこういう報道は一切ありませんでした。能中の場合は無事でしたが、あと一日終戦が遅かったらどうだったでしょうか。なにしろ終戦前夜に土崎が空襲されたことですから。

勉強もスポーツもできなかった時代でしたが、それでも戦後のオリピックに体操選手として同期の鍋谷鉄巳君が出場したり、また食堂へ入ることも禁止されていましたが、冬は汽車がよく遅れるので能代で、東能代で人の目を気にしながらもドンブリやウドンも食べたし、歩いて二ツ井まで帰ったことも三回ばかりあり、いくつになっても能代中時代はなつかしく思い出します。（タカハタ工機株式会社）

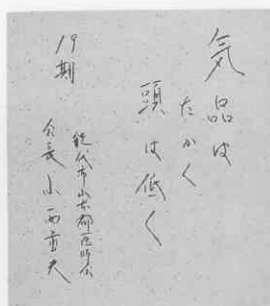
戦中・十三歳

旧制十九期 小西 重 夫

昭和十八年四月能代中学に入学、当時三百名の受験生があり、入学生は三クラス百五十名であったので二倍の競争率であった。小学校の成績表と口頭試問、それに体力テスト（戦時中のこと）があったと記憶しているが、懸垂が一回も出来ない太めが入学していたので、体

力の方はあまり関係なかったようである。

当時黄線一本の入った戦闘帽（今は知らない人が多いかも）を被り、登校時は同じ町内の一年から五年生が所定の場所に集合し、学年順に隊列を組んで行進、校門に立っている歩哨の先輩に拳手の礼をし、奉安殿を拜んで入校というのが建前で、集団訓練と規律重視（恐らくは全国一律）の行動であったようである。今は懐かしい長慶寺小路（現在の長慶寺が旧民生病院跡に在ったための呼称）を経て畠町・中和通りを行くのだが、やはり能代高女の前を通るときうきうきした気持ちにさせられたものである。もはや五十年あまり前のことであって、少女等の面影は定かには浮かんでこない。



学校では当時の敵性語である英語も教えられ、漢文の時間もあって様々な名文・諺等をいまだ忘れずに覚えているのは、若さであったと思うのである。戦時中なので今で言うクラブ活動としては、柔道・剣道・陸上競技・体操部位であったと思うが、敵性スポーツということで、野球・バスケット・バレー・テニス等は禁止種目であった。

一年生の頃はなんとか楽しげな学校風情もあり、グラウンド周辺の桜並木が満開になると見事な眺めであった。

そうこうして一年生の三学期二月のことだと思うが、我々万町組の生徒は例の如く隊伍を組んで学校の坂道に足を踏み入れた途端、アッ

ト驚いたことに校舎が見えないのである。歩哨の上級生にこっぴどく怒鳴られて一目散に帰宅、腰に藁縄をくくりつけ、軍手をはめて再登校。校舎は全焼し残り火がくすぶっているのを眺めて愕然としたのである。万町界限では強風・風上のせい、生徒誰一人気付く者もなくまた家族の者すら知らなかった有様で、翌朝いつもの通り集まり鞆を背負い登校したのであった。他の町内ではどうだったのか記憶にないが、恐らく同じ経験者もいたはずで、お笑い草であった。

以上一年生の時の苦い思い出であるが、昭和二十四年二月の第一次大火で家財ごと全焼し、写真等、当時を偲ぶ物は皆無となったが、ただ一つ、峰浜村の村長さんからもらった柔道部の写真コピー（二十年頃のか）が一枚手元にあるだけである。（能代市山本郡医師会会長）



瀟洒な校舎と教練

大正15年9月

能中「舎生」1期



排球部全県初制覇
昭和7年



硬式野球部
昭和12年

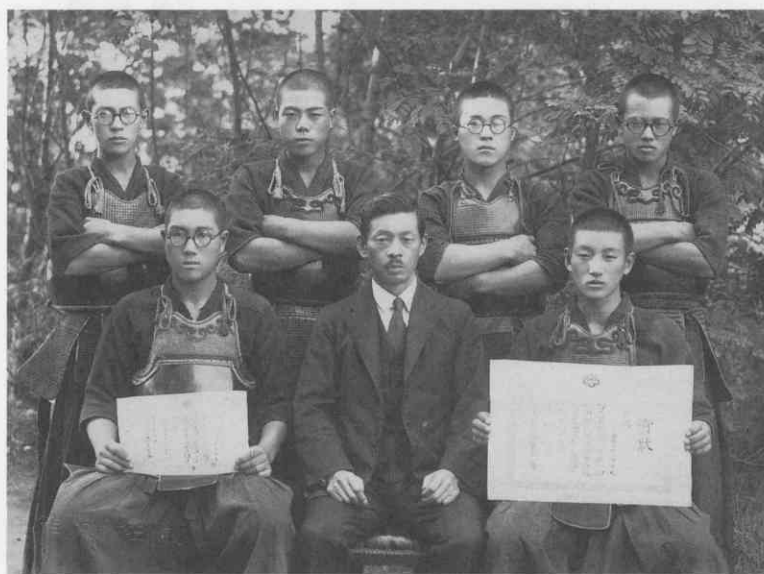


○能中時代の懐しい諸先生(あだ名)

校長 西田平一(ヘンタ) 昭和(トナリ)	衛生 正敏(ジャイアント)	物理
〃 新家利一(ウルヲ) (シラシラ)	田村照一郎(ライオン)	英語
〃 高橋一郎(ウツコ) (十五土く大西)	並江静雄(ホミッドロ)	植物
教頭 黒瀬達也(クマン)	村松四郎(ハシナ)	化学
〃 大内 定(ジニー)	中森増三	地理
鈴不(勇ヒラメ)	和田信雄	英語
小竹寛治(ウルフ)	北林 徹	工作
佐久高志(テロ)	吉田勇三(ウセイキ)	農業
相庭久三郎(ヒスル)	大山公三郎(シヤクシ)	音楽(講師)
野呂恒治	伊藤 茂	日本史(講師)
南初喜(ケシミ)	高橋登郎(ガン)	柔道
石丸金重(ササン)	武衛岩雄(ジヤ)	剣道
田山雄四郎(セツリ)	相場鉄蔵(ギンダ)	事務
川野卯一(ナンバ)	金谷清	教官
太田政治(ウツコ)	宮脇時太郎(ウサギ)	〃
須田定基(ガメ)	織田義光(ガイコウ)	〃
小葉田亮(フゲ)	菅原英之助(チイナ)	〃
上原俊一(バネネト)	渡辺政七	〃
立石栄吾(タカモ)	伊藤喜一郎(マカリ)	〃
森 蕃(アカガタ)		〃
徳原俊三(ビル)		〃
野村政治(アカゲ)		〃
〃		〃

十二期生 長岡幸作調

懐かしい諸先生のあだ名



剣道部
第1回県北武道大会優勝
昭和13年